

クリスチャン生活についての三つのたとえ

第一ペテロ 2 章 1-10 節

ロバート・D・ルギンビル博士著

<https://ichthys.com/Pet33.htm> からの翻訳

はじめに：第一章でペテロは、神のみことばである福音を信じることによって新しく生まれた信者としての私たちの立場について十分に説明し、考察しました。そして、この祝福された立場にある以上、私たちは信じた時と同じ方法で霊的に前進しなければならないこと、また、立場上の聖別に加えて、聖い生活を送らなければならないという原則をそこで確立しました。続いてペテロは、この第二章の最初の部分で、三つのたとえを用いて、霊的成長、霊的前進、霊的奉仕の過程について教えています。まず、クリスチャン生活において何らかの前進を遂げるためには聖別された行いが必要であることを改めて思い起こさせた後 ([第一ペテロ 2 章 1 節](#))、成長する子供のたとえによって霊的成長の過程を説明し ([第一ペテロ 2 章 2-3 節](#))、建物を建てるたとえによって霊的前進の過程を説明し ([第一ペテロ 2 章 4-8 節](#))、さらにレビ人の祭司職になぞらえることによって霊的奉仕の過程を説明しています ([第一ペテロ 2 章 9-10 節](#))。ここでペテロが述べていることの細部に注意深く目を向けるなら、すべてのクリスチャンが救われた後どのように生きるべきか、その本質について非常に価値ある洞察を得ることができます。

- (1) それゆえ (すなわち、神のみことばがすべての良いものの基礎である以上)、あらゆる悪、あらゆる欺き、偽善的な行い、ねたみ、そしてあらゆる悪口を捨て去り、
- (2) 生まれたばかりの乳飲み子のように、偽りのないみことばの乳を慕い求めなさい。それによって、あなたがたが救いに向かって成長するためである。
- (3) あなたがたは、主がすばらしい方であることを、すでに味わったのだから。
- (4) あなたがたが近づいて来たのは[イエス]である。この方は、人には捨てられたが、神[父]の目には選ばれた、非常に尊い生ける石である。
- (5) そして、あなたがた自身もまた、霊の家へと (すなわち、聖霊によって) 建て上げられつつあり、イエス・キリストを通して神に喜ばれる霊的ないけにえをささげる聖なる祭司職となるのである。
- (6) それゆえ、聖書にはこう書かれている。「見よ、わたしはシオンに一つの石を置く。選ばれた、尊い隅のかしら石である。彼を信じる者は、決して恥を受けることがない」。
- (7) この誉れは、信じるあなたがたのものである。しかし、不信者については[聖書に]、「家造りらの捨てたこの[まさにその]石が、礎のかしらとなった」とあり、
- (8) また、「つまずきの石、妨げの岩」とある。不従

順な者たちはこれにつまずくのであり、そのようになるよう定められている(すなわち、それは彼ら自身がキリストを拒むことを選んだからである)。(9) しかし、あなたがたは選ばれた種族、王なる祭司職、聖なる国民、神のものとして保たれる民である。それは、あなたがたを暗闇からその驚くべき光の中へと召してくださった方のすぐれた御業を、あなたがたが宣べ伝えるためである。

(10) あなたがたは、かつては「民ではなかった」が、今は「神の民」であり、[かつては神の]あわれみを受けていなかったが、今はそのあわれみを受けている。(第一ペテロ 2 章 1-10 節)

経験的聖別：第二章は、ペテロが第一章で詳しく取り上げた(そして私たちも学んできた)経験的聖別の原則をもう一度取り上げるところから始まります。この要約は具体的な内容を含んでいますが、クリスチャンが避けるべき悪い行いを列挙したほかの箇所(たとえば、[ガラテヤ 5 章 19-21 節](#))と同様、すべてを網羅することを意図したものではありません。言い換えれば、ペテロは、私たちがキリストにある立場上「聖なる民」であり、それゆえ当然、日ごとにますます聖く生きるよう最善を尽くすべきであることを思い起こさせるだけでは十分とせず、御霊の導きのもとで、ここにいくつかの具体的な事柄を含める必要を感じています。それは、私たちがすでに完全なクリスチャンとしての歩みを達成したと思い込まないためです。ペテロがこうしているのは、私たちを落胆させるためではありません(私たちは、自分の過ちや罪を主に告白するたびに、それらがすべて赦されることをよく知っています[[第一ヨハネ 1 章 9 節](#)]。また、罪——特に重大な罪——を抑えることにおいてよく努めているなら、この問題について必要以上に思い悩むことはないと確信してよいのです)。そうではなく、罪が人を欺く性質を持ち、その影響が広範囲に及び、あらゆるところに入り込むものであることを思い起こさせるためです(すなわち、私たちは救われた後も完全ではありません。[第一列王記 8 章 46 節](#); [ヨブ 15 章 14 節](#); [詩篇 143 篇 2 節](#); [ローマ 3 章 23 節](#), [5 章 12 節](#); [第一ヨハネ 1 章 8-10 節](#))。言い換えれば、ペテロがこうしているのは、たとえ私たちが、イエス・キリストを尊ぶ聖く聖別された生活を送ろうとする個人的な努力において「よくやっている」としても、この問題について謙遜であり続けるよう助けるためなのです。

捨て去り([第一ペテロ 2 章 1 節](#))：この聖別の原則をもう一度取り上げ、何をしてはならないかという具体例を挙げることによって実際の形で説明しているこの箇所が、積極的な霊的成長のために何が必要かについてのペテロの論述に先立っていることにも注目する価値があります。これは、私たちがこれまで何度も強調してきた、良い防御と持続的な攻撃とは相伴うものであり、どちらか一方に欠けるところがあれば、もう一方にも悪影響を及ぼすという原則を示しています。クリスチャン生活から最大限のものを

得て、私たちにできる限り主を尊ぶためには、聖く振る舞うだけでも、積極的に成長し、前進し、実を結ぶだけでも足りません——その両方を行う必要があります。なぜなら、どちらか一方だけで他方を伴わない取り組み方では、あまり遠くまで進むことができず、結局はかえって逆効果となるからです。このことはすべて、ペテロがここでアポテメノイ (apothemenoi :捨てる/脱ぎ捨てる) という分詞を用いていることによって示されています。私たちはこれを「捨て去ったので」と訳しています。ここで注意すべきなのは、これが信者の側の意図的な行動を表しているということです。それは偶然に起こることも、自動的に行われることでもありません。さらに、ペテロがこのあと列挙する好ましくない行いを(そのほかのあらゆるふさわしくない行いととも)に「脱ぎ捨てる」こと自体にも、かなりの程度の霊的成長が必要です。どのような罪であれ、それに効果的に抵抗するためには、何が罪であるのかをある程度詳しく知っている必要があります。というのも、この一覧が示しているように、重大な罪の大部分は非常に明白ですが、たとえば私たちが考えることや口にすることの中にも、罪となるものが多くあるからです。御霊によって与えられたペテロの命令を実行するためには、さらに、私たちが霊と体からどのように造られているのか、罪の性質について、私たちが携わっている霊的戦いについて、罪を犯してしまった時にどのように立ち直るのかについて、そして実際、神のみことばの真理のほかのあらゆる側面についても、ある程度知っている必要があります。なぜなら、罪に抵抗して成功することは、すべての物事を神の完全な観点から見ることと、実際には切り離すことができないからです。というのも、この世的な考え方、話し方、行動の仕方へと逆戻りしやすくなるのは、ここで言う正しい「神の観点」という高い場所から私たちが引きずり下ろされた時だからです。

(15) この世を愛してはならない。また、この世にあるものを愛してはならない。もし、この世を愛する者がいるなら、その人のうちには父に対する[真の]愛はない。(16) なぜなら、この世にあるすべてのもの、すなわち、肉の欲、目の欲、そして人生についての誇り高ぶりは、父から出たものではなく、この世から出たものだからである。(17) この世とその欲は過ぎ去りつつある。しかし、神のみことばを行う者は、永遠に[神と共に生き]続ける。(第一ヨハネ 2 章 15-17 節)

あらゆる悪([第一ペテロ 2 章 1 節](#))： 第一節のギリシヤ語 カキア (kakia:悪い/良くない) を「邪悪 (evil)」と訳すのは適切ではありません。というのも、英語の「evil」には、ある程度、特定の意味合いが強くとわりついているからです。たとえば、旧約聖書で「evil」という語が見られる場合、それはほとんど常に、ヘブル語の「悪い」(「良い」の反対)という語を訳したものです。また、ギリシヤ語には「evil」に当たる別の語「ポネーリア (poneria)」がありますが、これもその基本的な意味は「悪い」であり、必ずしも英語の「evil」という語が持つ特殊な意味合いをすべて含んでいるわけではありません。「カキ

「kakia」を「malice (悪意)」と訳すこと(KJV 訳、NIV 訳、ESV 訳など)は厳密には正しいのですが、今日の英語ではこの語は十分に理解されておらず、むしろ否定的な心の傾向を意味するように受け取られることがあります。しかし、ここで用いられているギリシヤ語は、「悪い」もの、あるいは罪深いものであるなら、考えること、言うこと、行うことのすべてを含んでいます。「ウィキッドネス(wickedness 邪悪)」(ASV 訳)も誤解を招く可能性があります。というのも、最悪の罪人でさえ、自分を「邪悪な者」だとは考えないかもしれないからです——「ウィキッド wicked」という語は、今ではおとぎ話に出てくる悪者や、暗い悪魔的な邪悪さを思わせるものとなっています——そして「カキア kakia」は、それほど特殊な意味を持つ語ではありません。「sinfulness (罪深さ)」は、「badness (悪さ)」以外では、おそらく最も近い英語でしょう。しかし、ペテロは罪を表す語幹(hamart-)に関連するギリシヤ語を用いてはいません。そうしようと思えば、容易にできたはずですが。ペテロがそれを避けたのは間違いなく、そうしなければ、この命令はまったく実行不可能なものに見えてしまい、実際にそうになってしまうからです。なぜなら、私たちは皆、時として「つまづく」のであり、最も靈的に進んだクリスチャンでさえ、決して罪のない者にはならないからです([伝道の書 7 章 20 節](#); [ローマ 3 章 9 節](#), [3 章 23 節](#), [7 章 14 節](#), [7 章 23 節](#); [ガラテヤ 3 章 22 節](#); [ヤコブ 3 章 2 節](#); [第一ヨハネ 1 章 6-10 節](#); [詩篇 143 篇 2 節](#)参照)。ですから、「badness (悪さ)」は、あまりこなれた表現ではありませんが、ここで意味されていることをよく伝えています。すなわち、クリスチャンにふさわしくない、あらゆる種類の思い、言葉、行いのことです。

「あらゆる悪」という表現を用いることによって、ペテロはまた、聖別が信者の生活のあらゆる面に及ぶべきであることを私たちが理解できるよう、十分に広い意味を持たせています。考えられるすべての罪深い行いをここに含めることは不可能でした。そのため、罪深い行いを列挙している聖書のどの一覧も、すべてを完全に網羅したものとして理解されるべきではなく、むしろ、私たちが避けるべき事柄がどのようなものであるかを例示したものとして理解されるべきです(たとえば、[第一コリント 6 章 9-10 節](#); [ガラテヤ 5 章 19-21 節](#); [エペソ 5 章 3-5 節](#))¹。それは、私たちが考えること、言うこと、行うことのすべてに及びます。結局のところ、私たちの行動には通常、その前に私たちの言葉があり、そしてその言葉は、さらに私たちの考えによって導かれているからです。

(17)「あなたがたはまだ分らないのか。口に入るものは何でも腹に入り、そして外に出される。(18) しかし、口から出るものは心から出て来るのであり、それが人を汚すのである。(19) というのも、心から、悪い思い、殺人、姦淫、不品

¹ 同じことは、たとえば[詩篇 15 篇 1-5 節](#)や[第二ペテロ 1 章 5-9 節](#)のような、徳を列挙した箇所についても当てはまります。

行、盗み、偽証、冒涇が出て来るからである。(20) これらが人を汚すのであって、洗わない手で食べることは人を汚さない」。(マタイ 15 章 17-20 節 /NKJV 訳)

「心という高地」を確保することが、このように聖別された行いの鍵となります。そして、その行いは聖別された言葉によって守られ、その言葉は聖別された思考によって守られます。だからこそ、このような論述では舌がしばしば強調されるのです。舌はこの二つの中間に位置し、行動に先立つと同時に、思考を明らかにするからです。

(2) 私たちは皆、多くの[罪深い]過ちを犯す(字義的には「多くつまづく」、すなわち、いくらか不注意に罪を犯す)からである。もし、言葉において[罪深い]過ちを犯さない人がいるなら、その人は[行いにおいて]完全な人であり、したがって自分の全身をも制御することができる。(3) 馬を私たちに従わせるために、その口にくつわをはめることを考えてみなさい。そうすることによって、私たちはその全身を思いどおりに動かすことができる。(4) また、船がどれほど大きなものであり、強い風に吹き動かされるものであっても、非常に小さな舵によって、舵を取る者の望むところへ動かされることも考えてみなさい。(5) 同じように、舌も小さな器官ではあるが、大きなことを誇る。見よ、どれほど小さな火が大火事を引き起こすことか。(6) 舌も[まさにそのような]火である。舌は私たちのほかの器官の間にあって、あらゆる悪の体系をその内に含み、全身を汚し、人間の生のあらゆる面を燃え上がらせ、そして自らも地獄の火によって燃やされる。(7) あらゆる種類の鳥、獣、這うもの、泳ぐものは、人間によって飼いならすことができ、また実際に飼いならされてきた。(8) しかし、舌を飼いならすことのできる人はいない。それは抑えることのできない悪であり、死をもたらす毒に満ちている。(9) 私たちは舌をもって、私たちの主であり父である方をほめたたえ、また同じ舌をもって、神に似せて造られた[同胞である]人を呪う。(10) 同じ口から、祝福と呪いとが出て来る。兄弟たちよ、このようであってはならない。(ヤコブ 3 章 2-10 節)

あらゆる欺き([第一ペテロ 2 章 1 節](#)): ギリシヤ語のドロス *dolos* は、卑劣な策略、計略、あるいは欺きを意味します。「悪」の場合と同じように(また、この一覧の最後に出てくる「悪口」の場合も同様ですが)、ペテロはここで強調のために「あらゆる」という語を加え、クリスチャンがどのような形で、人を欺くような振る舞いをするのは全く容認できないということを強調しています。そのような手段は、ほかの信者との関係においても、さらには不信者との関係においても、決して正当化することはできません。この世では「恋と戦争では何でもあり」というのが通用するのかもしれませんが——そして策略が戦術の重要な一部であることは確かです——しかし、信者に対してであれ不信者に

対してであれ、クリスチャンが示すべき高潔な振る舞いの中に、二枚舌や詐欺、見せかけの入り込む余地はありません。欺きの手段は、必然的に、ふさわしくない動機を覆い隠すものです——あるいは少なくとも、たとえ「善意」からそのような手段を用い始めたとしても、信者をそのような道へと導きやすいものです。これに対する例外は、すでに述べた戦争の場合と、犯罪にかかわる場合です(すなわち、強盗、誘拐犯、殺人犯、あるいは敵の工作員に直面した場合には、その場で使えるどのような策略でも用いるのが賢明でしょう)。そのような特殊で、実際にはあまり起こりそうにない状況を除けば、ナタナエルについて語られた私たちの主の称賛の言葉を覚えておくのがよいでしょう。「見よ、まことのイスラエル人だ。そのうちには偽りが無い！」([ヨハネ 1 章 47 節](#) /KJV 訳)

偽善([第一ペテロ 2 章 1 節](#))：ここで使われているギリシヤ語は、英語の hypocrite (偽善者)の語源となったもので、その基本的な意味は「役者」です。したがって、偽善とは「演じること」、すなわち見せかけることです。その悪名高い例がパリサイ人の偽善です。彼らは神を愛する者、律法を行う者であるかのように装っていましたが、実際には自分自身を愛する者であり、自分たちの利益と益のために律法の外面的な装いを利用する者たちでした。ペテロがここで複数形を用いているのは、一つには強調のためですが、もう一つには、これを私たちにとって単なる概念としてではなく、避けなければならない具体的な問題行動の数々として示すためです。私たちが気取った態度を取ったり、実際には単に「人に見せるため」だけの何らかの振る舞いをしたりする時にはいつでも、聖書的に言えば、少なくとも偽善に陥る危険があります。ですから、私たちが避けるべきこの好ましくない行いには、自分自身に適用するのとは異なる基準を他人に当てはめるという明らかな問題だけでなく、実際の内面とは違う者に見えるように、他人の目を意識して何らかの「演技」をすることも含まれます。真実の愛のうちを歩んでいるクリスチャンであれば、良い印象を与えることに何の問題もありません。なぜなら、その場合、その「良さ」は聖霊によって力を与えられた、本物の良さだからです。それに対して、偽りの外面を作り上げても、誰にも真の益をもたらすことはなく、私たち自身に深刻な霊的害を及ぼす可能性があります。なぜなら、それは本質的に、行いによって嘘をつくことだからです(結局のところ、演技とはすべてそのようなものなのです)。

成長する子供([第一ペテロ 2 章 2 節](#))：第二節でペテロは、成長する子供のたとえを用いて、クリスチャンが霊的に成長するための正しい過程を説明しています。「生まれたばかりの乳飲み子」が、自分の体を成長させる母乳を強く欲しがるのと同じように、新しい信者も(そして実際にはすべての信者も)同じように「みことばの乳」、すなわち聖書の中にある真理を強く慕い求め、それを飲むことによって霊的に成長すべきなのです。もちろん、私たちの成長は(直接目に見える)肉体的なものではなく、むしろ霊的

なものです(それは、私たちの言葉や行いから推し量ることしかできません)。この二つの比較には、もう一つ違いがあります。赤ん坊には文字どおりの乳を求める自然で抑えることのできない欲求がありますが、信者の場合には、ここでペテロがしているように、霊的な乳を求める思いをかき立てよう促される必要があります。だからといって、信者、特に新しい信者が生来、真理に関心を持っていないということではありません——もちろん、私たちは真理に関心を持っています。しかし同時に、私たちは人間であり、自由意志を持っているため、少しでも難しいことや、肉体的にすぐ喜びを感じられないことから、非常に容易に気をそらされてしまうということも事実です。真理が教えられるのを聞き、その真理を信じ、その真理を自分の生活に適用することには、大きな満足があることは疑いありません。しかし、それには努力が必要であり、その喜びや満足が必ずしもすぐに、あるいは自動的に得られるわけではありません。最も喜ばしいのはその結果ですが、その結果——霊的成熟——は、正しく義にかなった仕方、前もって一貫した努力を続けなければ得られません。運動競技に勝つことに大きな喜びがあることは間違いありませんが、その勝利に備えるために、多くの苦痛、犠牲、努力が必要であったことも、だれの目にも明らかです——しかも、望んだ結果を得るためには、それらを「正しい方法で」行わなければなりません。運動競技とは違って、すべての信者が「賞を勝ち取る」ことができます——そして実際、それこそ私たちの主が望んでおられることです。しかし、運動競技の場合と同じように、かなり長い期間にわたって、正しい方法に従うことを自らの意志で、日々一貫して続けなければ、私たちは目標を達成することはできません。

また、競技をする者も、規則に従って競技をしなければ、賞を得ることはできない。([第二テモテ 2 章 5 節](#) /NASB 訳)

これが意味するのは、真理が教えられていない教会で重んじられる一員になるためには、間違いなく多くの時間と努力と資源を費やす必要があるとしても、そのような努力や犠牲をいくら重ねても、信者を霊的成熟にまで到達させることはできないということです。霊的成熟は、主と共に霊的に前進していく中で訪れる試練に耐えるにふさわしい者となり、また主のために効果的に奉仕するようになるために、必ず到達しなければならない重要な段階です。それを成し遂げるために必要なのは真理です。すなわち、聖書に含まれている真理が、正統的な仕方と整理され、教えられ、それを信じ、自分の生活に一貫して適用することです。霊的成熟へと前進するためには、ほかにも必要なことがあります(たとえば、祈り、聖書を読むこと、聖別)、内容のある正統的な仕方と教えられ、神のみことばの真理に代わるものではありません。それこそが、あらゆる霊的成長にとっての母乳なのです。

ペテロは非常に重要なこととして、私たちが慕い求めるべき「乳」、すなわち教えは、「偽りのない」ものでなければならぬと付け加えています(ここで使われている語は、前の節で捨て去るように命じられている「欺き」と同じ語根から来ています)。アジアのクリスチャン共同体の至るところで、さまざまな種類の偽教師たちによって真理が脅かされることが常にあったことを、パウロとヨハネ双方の著作から私たちは知っています(聖書に見られる中では、グノーシス主義者とユダヤ主義者がその最も顕著な二つです)。したがって、この「偽りのない」という限定は、「わずかなパン種」が時として粉のかたまり全体を膨らませるのに十分であることを思い起こさせる重要な言葉です([第一コリント 5 章 6 節](#); [ガラテヤ 5 章 9 節](#))。それ以外の部分は真理であるように見える教えの中に異端的な教えが持ち込まれると、それを聞いて受け入れるすべての人の信仰を損なうことがあり、実際しばしばそうなります。ほかの点では全く問題のない乳でも、わずかな毒が入れば人が飲むには適さなくなるのと同じように、私たちも、本質的に偽りであるあらゆる教えに対して警戒し、見張っている必要があります——とりわけ、終わりの時がますます近づいている今はなおさらです。その時には、そのような偽りの教えが特に致命的な問題となることが預言されているからです([マタイ 24 章 4-5 節](#), [24 章 11 節](#), [24 章 24-27 節](#); [第二テモテ 3 章 1-13 節](#)参照)。

(1) しかし、御霊は明らかに言っておられる。後の時代になると、ある人々は惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れ去るようになる。(2) それは、良心を焼き金で焼かれた偽善的な偽りを語る者たちによるのである。([第一テモテ 4 章 1-2 節](#) /NKJV 訳)

(1) しかし、民の中には偽預言者もいた。それと同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れ、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買収してくださった主さえ否み、自分自身に速やかな滅びを招くようになる。(2) そして多くの者が彼らの滅びに至る道に従い、そのために真理の道がそしられるようになる。([第二ペテロ 2 章 1-2 節](#) /NKJV 訳)

最後に第二節で、ペテロは、まさにみことばの乳を取り入れること、すなわち、それを求め、聞き、そして信じることによって、私たちが「救いに向かって成長する」のだと語っています。これは、信者である私たちがまだ救われていないという意味ではありません(私たちはすでに救われています)。また、もし主の再臨まで生きるなら、その時によみがえらされることによって救われることがない、という意味でもありません(私たちは救われます)。ここで言われているのは、立場上の救い(信者である私たちは皆、すでにそれを得ています)のことも、主と共に永遠に安全にいたることになる永遠における最終的な救い(これは信じるすべての者が受け継ぐものです)のこともありません。むしろ

ろ、経験的聖別の場合と同じように(それもまた、すべての信者が今すでに持っている立場上の聖別とも、永遠の日に私たち全員が持つことになる最終的聖別とも異なります)、ここでの「救い」とは、私たちがすでに持っている信仰という土台の上に成長を加えることによって、私たちの主イエス・キリストの栄光のために、信者として与えられている立場を最大限に生かすことを指しています([ローマ 5 章 9-10 節](#), [13 章 11 節](#); [第一コリント 1 章 18 節](#), [3 章 15 節](#), [5 章 5 節](#), [15 章 2 節](#); [第二コリント 1 章 6 節](#), [2 章 15 節](#); [第一テサロニケ 5 章 8-9 節](#); [第一テモテ 4 章 16 節](#); [第二テモテ 2 章 10 節](#), [3 章 15 節](#), [4 章 18 節](#); [ヘブル 1 章 14 節](#), [9 章 28 節](#); [ヤコブ 1 章 21 節](#); [第一ペテロ 4 章 18 節](#); [ユダ 23 節](#))。

それゆえ、私の兄弟たちよ、あなたがたはいつも[真理に]従順であったように、私が[あなたがたと共に]いた時だけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて、自分自身の救いのために励みなさい。([ピリピ 2 章 12 節](#); [第二ペテロ 1 章 10-11 節](#)参照)

主が「素晴らしい」方であることを味わう([第一ペテロ 2 章 3 節](#))：ペテロは、成長する信者を成長する子供になぞらえたこの比較を、強調を込めた修辭的な表現で締めくくっています。ここでは、ギリシヤ語文法で「単純条件文」と呼ばれるものが使われていますが、意味の上では決して単純ではありません。上で訳したように、この表現は原因を表す節に相当しますが、そこには皮肉を込めたひねりがあります。「もしあなたが知っているなら……もちろん知っていますよね、本当に!?!」クリスチャン生活において少しでも前進してきた信者なら、主が「素晴らしい」方であることを確かに知っているはずです。ここで使われている クレーストス(chrestos)という語は、「善」を表すギリシヤ語として最も一般的な語ではなく、しばしば有用性、適切さ、役に立つことという意味合いを伝えます。したがって、ペテロがここで用いている クレーストスは、「慈愛に満ちた」「心地よい」「徳のある」「良い」のいずれも適切な訳ですが、「素晴らしい」と訳するほうが、私たちの主のご性質のすばらしさと、私たちの霊的成長を主が完全に導き、見守ってくださることの両方を、よりよく表しています——そして、それこそがここでのペテロの主要な論点なのです。私たちは当然、みことばの乳を慕い求めるべきであり、霊的成長という務めに献身すべきです。何ととっても、私たちはイエス・キリストを信じて救われた時に、その良さとすばらしさをすでに「味わった」のです。そしてそれ以来、主について学び、日ごとに主とより親しく歩むようになる中で経験してきたすべてのことが、その良さ、そのすばらしさ、そして霊的なあらゆる面で私たちがさらに前進していくうえで、それがいかに有益であるかを確証してきました。ですから、ペテロはここで、私たちがすでに知っていて、すでにそれに基づいて行動しているべきこと以外、何も語ってはいません。なぜなら、今や私たちは真の命の木から食べた者として、真理がどれほど良い

「味」がするか、また、日ごとに、あるべき仕方、よりいっそう主を喜ばせるために、一歩一歩イエス・キリストに近づいていくうえで、それがどれほど素晴らしいものであるかをよく知っているからです([詩篇 119 篇 103 節](#); [ヘブル 6 章 4-5 節](#))。

ああ、主の恵みふかきことを味わい知れ。主に寄り頼む人はさいわいである。
([詩篇 34 篇 8 節](#) /KJV 訳)

生ける石であるキリスト([第一ペテロ 2 章 4 節](#))：イエス・キリストは岩であり([申命記 32 章 4 節](#); [第一サムエル 2 章 2 節](#); [第二サムエル 22 章 47 節](#), [23 章 3 節](#); [詩篇 18 篇 2 節](#), [18 篇 46 節](#), [19 篇 14 節](#), [61 篇 2 節](#), [118 篇 22 節](#), [144 篇 1 節](#); [イザヤ 17 章 10 節](#), [28 章 16 節](#), [44 章 8 節](#), [51 章 1 節](#); [ハバクク 1 章 12 節](#); [ローマ 9 章 33 節](#); [第一コリント 10 章 4 節](#); [出エジプト 17 章 6 節](#); [民数記 20 章 8 節](#); [申命記 32 章 4-37 節](#); [イザヤ 8 章 14-15 節](#)参照)、教会の隅のかしら石であり([マタイ 16 章 18 節](#); [第一ペテロ 2 章 6 節](#))、私たちが「近づいて来た」「生ける石」であり([第一ペテロ 2 章 4 節](#))、また、私たちの霊的な「建物」全体の土台となる方です([マタイ 7 章 24-25 節](#); [ルカ 6 章 47-49 節](#); [第一コリント 3 章 11 節](#))。キリストについてのこのすばらしい描写は、キリストが絶対的に真実で、信頼できる方であることを示すと同時に、私たちがキリストに頼り、キリストに信仰を置くことが絶対に必要であることを、非常に鮮やかに示しています。建物が堅固な土台の上に立たなければならないのと同じように、私たちも、救いの時にも、その後、主に従って前進する一歩一歩においても、私たちの信仰の絶対的な土台である方に全面的に頼らなければ、救われることも、霊的に前進することもできません。ですから、「岩」は、決して変わることはない完全な救い主にまさにふさわしい称号ですが、それと同時に、絶対的に信頼できる方と私たちが密接に結びついていることをも思い起こさせるものです。イエス・キリストは、私たちのクリスチャン生活のすべてを支える盤石の土台です。そのため、どのような洪水が押し寄せようと、私たちが主に頼り続けるかぎり、私たちは安全であり、しっかりと守られているのです。

人には退けられたが、神[御父]の目には選ばれ、非常に尊ばれている([第一ペテロ 2 章 4 節](#))：[第一コリント 2 章 8 節](#)では、もしこの世の支配者たちが、キリストがどのような方であるか——父なる神によって選ばれ、尊ばれている方であること——を理解していたなら、決してキリストを十字架につけはしなかったであろう、と述べられています。そして、キリストがこの世から軽んじられ、今もなお軽んじられているように——しかし、キリストの御父であり私たちの父でもある方からは、そうではありません——私たちもまた、私たちと運命を共にしてくださったキリストと運命を共にすることを選んだ者として、この世から軽んじられています。しかし、キリストがすべての栄誉の中で最も高い栄誉、すなわち、すべての名にまさる御名を与えられ、その御名の前にすべての者がひ

ぎをかがめることになるように([ピリピ 2 章 9-11 節](#); [エペソ 1 章 21 節](#)参照)、キリストにあって最後まで耐え忍ぶ私たちも、来たるべきあの偉大で栄光に満ちた日に、キリストと共に栄光を受けることになります([ローマ 8 章 17 節](#), [8 章 30 節](#); [第二テモテ 2 章 10 節](#))。私たちもまた、選ばれた方にあって今すでに選ばれた者であり、永遠の昔からの御父のご計画に定められたとおり、イエスの花嫁の一員となるために特別に選ばれた者なのです([ローマ 8 章 29-30 節](#), [8 章 33 節](#), [11 章 7 節](#); [コロサイ 3 章 12 節](#); [第二テモテ 2 章 10 節](#); [テトス 1 章 1 節](#); [第一ペテロ 1 章 2 節](#))。この世には、この世なりの優先順位と価値の序列があります。しかし、それらは私たちにとって何の意味もありません。私たちの祝福された希望は、復活と永遠の命、そして、この世ではなく私たちが選んだ方から良い報いをいただくことにあるのです。

(18)この世があなたがたを憎むなら、あなたがたより先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。(19)もしあなたがたがこの世のものであったなら、この世は自分のものを愛するであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではなく、わたしがあなたがたをこの世から選び出したので、それゆえに、この世はあなたがたを憎むのである。(20)わたしがあなたがたに教えたこの原則を覚えておきなさい。「僕はその主人にまさるものではない」。もし彼らがわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。(ヨハネ 15 章 18-20 節; [マタイ 10 章 25 節](#); [第一ヨハネ 3 章 13 節](#)参照)

(10) 私は、与えられた神の恵みに従って、賢い建築家のように土台を据え、ほかの人がその上に建てている。しかし、それぞれの人は、その上にどのように建てるかに注意しなければならない。(11) なぜなら、すでに据えられている土台、すなわちイエス・キリスト以外に、だれもほかの土台を据えることはできないからである。(12) そして、もしだれかがその土台の上に、金、銀、宝石、[あるいは]木、草、わらを用いて建てるなら、(13) [いずれの場合にも]その人の働きは[その真の質が]明らかにされる。なぜなら、[さばきの]日が、それが[本当はどのようなものであるかを]明らかにするからである。それは火によって明らかにされる(字義的には「覆いを取り除かれる」)からである。そして、その火が、一人一人の働きが[実際に]どのような質のものであるかを吟味する(字義的には「試金する」)。(14) もし、だれかが[キリストへの信仰という]土台の上に建てた働きが残るなら(すなわち、火による吟味によって焼き尽くされなければ)、その人は[その働きに対する]報いを受ける。(15) もし、だれかの働きが焼き尽くされるなら、その人は[それによって得られたはずの報いを]失う。しかし、その人自身は救われる——ただし、[今述べたように]火をくぐるようにしてである[その火が、その人の偽りの働きを価値のないものと判定し、それらを焼き尽くすのである]。(第

[一コリント 3 章 10-15 節](#))

生ける石として霊の家に建て上げられる([第一ペテロ 2 章 5 節](#)): [マタイ 16 章 18 節](#)で、私たちの主がペテロを「岩」(ペトロス petros)と名づけ直されたのは、彼が、教会の土台であり、隅のかしら石であり、かしらであられるキリストご自身という「岩」(petra)の上に教会が大きく建て広げられていくという「奥義」において、重要な役割を果たす者となるからでした。それと同じように、ここでペテロは私たちを「石」と呼んでいます。私たちは、イエスが建てておられる永遠の建物を構成する等しく重要な部分であり、「生ける石」なのです。なぜなら、教会は冷たく死んだ物質的な建造物ではなく、生きて息づき、霊的に生きている信者たちの集まりであり、アダムとエバから今日に至るまで、そしてキリストの栄光に満ちた再臨の時に完成するまで、一つ一つの石、一人一人の信者によって建て上げられているからです。聖霊によってペテロに与えられたこの美しいたとえば、私たちがキリストと一つであり、また互いに一つであるという本質的な一体性と、私たち全員が共にその一部を担っている胸躍る大事業とを、一つのたとえの中に見事に表しています。私たちは皆この建物の石であり、生ける建物を構成する生ける石です。その隅のかしら石は、私たちに永遠の命を与え、私たちをご自身と一つにし、また互いにも一つにしてくださった命の主です。そして、この働きはまだ完成しておらず、主が現され、再臨の時に私たちが復活によって変えられるその日まで完成することはありません。しかし、私たちが永遠にその一部をなすこの生ける建物——キリストにあるすべての兄弟姉妹から成り、永遠の命を得るために私たちが信頼してきた岩の上に建てられている建物——が首尾よく完成することは、絶対に確かです。個々の人は失敗することがあるかもしれませんが([ルカ 14 章 28-30 節](#))、教会としての私たちは、だれもが皆キリストのからだの一員であり([ヨハネ 17 章 11 節](#), [17 章 20-23 節](#); [第一コリント 1 章 10 節](#); [エペソ 4 章 3-13 節](#))、あの偉大な日に、あらゆる点でキリストにあって完成するまで、悪しき者のあらゆる妨害を押し切って前進していきます。そして「陰府(黄泉)の門」そのものも、この聖なる働きにおいて私たちを妨げることも、私たちに打ち勝つこともできません([マタイ 16 章 18 節](#))。

(19) それゆえ、あなたがたはもはや異国人でも居候でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族の一員である。(20) あなたがたは使徒たちと預言者たちの土台の上に建てられ、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。(21) このキリストにあって、建物全体が組み合わされつつあり、主にある聖なる宮へと成長していく。(22) このキリストにあって、あなたがたもまた、御霊によって神の住まいとなるよう共に建て上げられているのである。([エペソ 2 章 19-22 節](#))

キリストは御子として神の家を治める方として[忠実であられた]。そして、も

し私たちが、[自分たちが]誇りとしている希望を最後まで強く保つなら、私たちこそその家なのである。(ヘブル 3 章 6 節)

霊的ないけにえをささげる聖なる祭司職(第一ペテロ 2 章 5 節): 私たちが異邦人であっても、また、おそらく私たち自身はレビの子孫ではなく、さらに私たちの多くが男性ではなく女性であっても、この節が保証しているように、イエス・キリストを信じるすべての者は、今や神の祭司です。それは確かに当然のことです。なぜなら、イエス・キリストは究極の大祭司であられ(第一テモテ 2 章 5 節; ヘブル 7 章 24-25 節; ヨブ 16 章 20-21 節; イザヤ 53 章 12 節後半; ヘブル 6 章 19-20 節, 9 章 11-12 節, 9 章 24 節参照)、私たちはキリストと一つだからです(ヨハネ 14 章 20 節, 15 章 1 節以下; ローマ 16 章 7 節; 第二コリント 5 章 17 節; エペソ 2 章 6 節, 2 章 10 節; ヘブル 3 章 14 節; 第一ペテロ 5 章 14 節; マタイ 28 章 18-20 節; エペソ 3 章 6 節; ヘブル 3 章 1 節, 3 章 14 節; 第二ペテロ 1 章 4 節参照)。

それゆえ、彼はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければならなかった。それは、神にかかわる事柄において、あわれみ深い忠実な大祭司となり、民の罪のためになだめをなすためであった(すなわち、ご自身をいけにえとしてささげることによって)。(ヘブル 2 章 17 節)

それゆえ、兄弟たちよ、[今や]聖別され、天からの召しにあずかる者たちよ、私たちが告白する、[私たちを救うために]遣わされた方、また[その救いの]大祭司であるイエスに、心を向けなさい。(ヘブル 3 章 1 節)

(14) それゆえ、私たちには、もろもろの天を通って行かれた(すなわち、神殿の垂れ幕を通るようにして)偉大な大祭司、神の御子イエスがおられるのだから、[イエスに対する信仰の]告白を強く保とうではないか。(15) 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情することのできない方ではない。なぜなら、この方もまた、罪は犯されなかったが、[私たちと]同じように、すべてのことについて試みを受けられたからである。(ヘブル 4 章 14-15 節)

そして、キリストは**私たちを御国とし**、ご自身の神また父に仕える祭司としてくだされた。栄光と力とが、とこしえにキリストにあるように。アーメン。(黙示録 1 章 6 節)

(9) そして彼らは新しい歌を歌って言った。「あなたは巻物を受け取り、その封印を解くにふさわしい方です。あなたはほふられ、その血によって、あらゆる部

族、国語、民族、国民の中から[人々を]私たちの神のために買い取られたからです。(10) そして、**彼らを**私たちの神のために御国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるでしょう。』([黙示録 5 章 9-10 節](#))

霊のいけにえ([第一ペテロ 2 章 5 節](#))：キリストを信じるすべての者がその一員であるこの新しい祭司職は、レビ人の祭司職とは大きく異なっているということを強調しておくことが重要です——ちょうど、キリストの大祭司職がレビ制度の大祭司職よりもすぐれているのと同じです([ヘブル 7 章 1-28 節](#))。キリストは究極の王であると同時に究極の祭司でもあり、栄光を受けられたその御身において、この二つの職務を兼ね備えておられます([詩篇 110 篇 1-4 節](#)；[ゼカリヤ 6 章 13 節](#)後半；[ヘブル 7 章 1 節](#)；[エレミヤ 33 章 16-18 節](#)参照)。ですから、上で引用した最後の二つの箇所が示しているように、私たち信者が共にあずかっている祭司職は、大祭司であるキリストとの関係に基づいて与えられたという点でレビ人の祭司職とは異なっているだけでなく、その祭司職はまた、王の王、主の主であるキリストと共に私たちがあずかる支配権とも切り離すことのできない形で結びついています([ローマ 8 章 17 節](#)；[第二テモテ 2 章 12 節](#)；[黙示録 1 章 6 節](#)、[2 章 26-27 節](#)、[3 章 21 節](#))。したがって、私たちがささげるべきいけにえも同様に、レビ人がささげたものとは大きく異なっています。今やそれらは本質的に完全に霊的なものであり、それゆえ、モーセの律法のもとでの以前の象徴的ないけにえに代わる真実のいけにえなのです([第一コリント 5 章 7 節](#)；[ヒリピ 2 章 17 節](#)、[4 章 18 節](#)；[ヘブル 13 章 15 節](#))——これらこそ、第一ペテロのこの箇所でペテロが述べている「イエス・キリストを通して神に喜ばれる霊的ないけにえ」です。

(1) それゆえ、兄弟たちよ、私は神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、生きた、神に喜ばれるいけにえとしてささげなさい——[これこそ]霊的に行うあなたがたの「祭司としての奉仕」である。(2) この世に同調してはならない。むしろ、考え方を新たにすることによって造り変えられなさい。それによって、あなたがたに対する神の御心が何であるか、すなわち、何をすることが良く、神に喜ばれ、正しいのかを見分けることができるようになるためである。([ローマ 12 章 1-2 節](#))

そして、私たちはキリストと一つであり、キリストと共に祭司であるので、祈りによって恵みの御座に近づくために仲介者を必要とするのではなく、今や御父のもとへ直接、直ちに近づくことができます([エペソ 2 章 18 節](#)、[3 章 12 節](#)；[ヨハネ 14 章 13-14 節](#)；[ローマ 5 章 1-2 節](#)参照)。

それゆえ、[御父の]恵みの御座に、確信をもって大胆に近づこうではないか。

それは、[御父の]あわれみを受け、時にかなった助けのために[御父の]恵みを得るためである。(ヘブル 4 章 16 節)

「霊的ないけにえ」そのものについて言えば、レビ人の祭司たちが、モーセの律法に定められた儀式を聖書の規定に従って執り行うことになっていたのと同じように、今日のすべての信者には、御霊によって少なくとも一つの霊的賜物が与えられ、イエス・キリストによってミニストリーが割り当てられ、その働きがもたらす結果は御父によってあらかじめ定められています(第一コリント 12 章 4-7 節)。私たちは、目に見える教会が伝統的に「ミニストリー」という言葉を用いてきたような意味で、これらのミニストリーを捉えないようにすべきです。キリストによって真に定められた個々のミニストリーはすべて、直接的であれ間接的であれ、ほかのクリスチャンの霊的成長に貢献するものです。ですから、信者が自ら神のみことばを教えているのであれ、教えるミニストリーを支援しているのであれ、自ら伝道のミニストリーに携わっているのであれ、それに携わる人々を支援しているのであれ、自らほかの人々を励まし、キリストを求め、キリストに従うよう助けているのであれ、それを間接的に行っているのであれ、真のミニストリーはすべて、結局のところ神のみことばの真理を推し進めることに行き着きます。なぜなら、聖霊によって力を与えられた真理を通してのみ、私たちは、私たちの主が私たちに何をするよう望んでおられるのかを知ることができるからです。

(1) それゆえ、兄弟たちよ、私は神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、生きた、神に喜ばれるいけにえとしてささげなさい——[これこそ]霊的に行うあなたがたの「祭司としての奉仕」である。(2) この世に同調してはならない。むしろ、考え方を新たにすることによって造り変えられなさい。それによって、あなたがたに対する神の御心が何であるか、すなわち、何をするのが良く、神に喜ばれ、正しいのかを見分けることができるようになるためである。(ローマ 12 章 1-2 節)

聖書にこう書かれているのはそのためである(第一ペテロ 2 章 6 節)： ペテロがこれに続く引用(イザヤ 28 章 16 節からの引用)の前に置いているこの言葉は、イザヤがシオンの岩について述べた箇所が明らかにメシヤについてのものであり、私たち一人一人の信仰がその上に据えられ、堅く安んじている岩であるキリストを前もって指し示していたことを示しています。キリストは、私たち全員がその一部をなしている建物の隅のかしら石です。キリストは特別に選ばれた土台石であり、この方にあつて私たちもまた選ばれた者です。キリストは試され、尊く、値をつけることのできない石、御父の目に非常に価値ある石であり、この方を通して私たちもまた愛おしい者とみなされています。そして私たちは、教会のすべてのものの土台であるこの方とのこの関係を、この方への信仰

を通して持っています。この方への信仰によって、私たちは「決して恥を受けることはありません」。これは、イザヤの箇所では「決して揺るがされることがない」と述べられている言葉を、聖霊に導かれてペテロが適用したものです。²[2] キリストを信じる人間の立場から見れば、キリストに信頼し、確信を置くことによって、私たちは自分たちの永遠の将来について何も心配する必要がありません。一方、建物のたとえという観点から見れば、生ける石である私たちは、この完全な建物、すなわち教会の中で自分たちに与えられた場所から決して揺さぶられて外れることはありません。私たちは、完全な建築家である天の父によってその中に完全に据えられており、建物全体は唯一の土台である私たちの主イエス・キリストの上に堅く据えられているのです。このように、イザヤは岩の到来と、私たちがその方と親密に一つにされることを預言することによって、メシヤの王としての地位と祭司職を含め、メシヤがどのような方であり、何を持っておられるか、そのすべてに私たちもあずかることを間接的に予告していたのです——「聖書に[この言葉が]こう書かれているのはそのためです」。

この栄誉(第一ペテロ 2 章 7 節)： 私たちが救い主イエス・キリストと一つにされていることによって与えられている、御父のもとへ直接近づくことのできる特権は、世界の歴史において前例のないものであり、まことに並外れた栄誉です。しかし、それは目で見ること、感じることも、実際に体験することもできないため、十字架で主が勝ち取られたすべてのものにあずかる者として、神に仕える王なる祭司とされているという、イエス・キリストにあって私たちが持つこの高い身分を、私たちが本来そうすべきほど深く認識していないことは、ある意味では理解できるものの、それでも残念なことです。信者である私たちは、キリストの花嫁であり、キリストのからだの一員として受けている数々のすばらしい祝福を、少なくとも時折は思い起こすべきです。とりわけ、私たちが常に持っているべき主にある喜び——私たちの真の力の源であるその喜び——を十分に持っていないと感じる時には、なおさらです([ネヘミヤ 8 章 10 節](#))。³ この世は、この世の目から見ればどれほど低い境遇にあるクリスチャンであっても、この世で最も選ばれたエリートたちの権力や地位をはるかに上回る身分を神から与えられているという事実を見ることができず、ましてそれを価値あるものとは認めません。この世の悪しき者たちは私たちがあざ笑うかもしれませんが、神は彼らをあざ笑われます([詩篇 37 篇 13 節](#))。

² ペテロがこの引用でおおむね七十人訳に従っているのは、彼の読者たちが、このよく知られた旧約聖書のギリシア語訳に慣れ親しんでいたためであることは間違いありません。ヘブル語の動詞 chush は、一般に人について用いられ、「急ぐ」という意味ですが、イザヤ書では比喩的に用いられているため、「揺るがされる」と訳すことも十分に妥当です。英語で will never be rattled(「決して動揺させられない」)と訳すなら、この動詞が含意している身体的な揺さぶりと心の動揺の両方を表すことができます。

³ キリストと一つにされていることによってすべての信者に与えられる主な恩恵のいくつかについては、[『Bible Basics 4B: 救済論』第 III 部「救われるとはどういうことか」](#) <英文>を参照してください。

そして私たちには、この実にすばらしい祭司としての身分と、それに伴う恵みの御座への直接の接近を喜ぶ十分な理由があります。なぜなら、私たちは、それが現実のものであり、言葉では言い表せないほどすばらしいものであることを、信仰によって知っているからです。

〔それゆえ私たちは〕見えるものに目を留めるのではなく、見えないものに〔目を留めよう〕。見えるものは一時的であるが、見えないものは永遠だからである。(第二コリント 4 章 18 節)

私たちは、見るところによってではなく、信仰によって歩んでいるからである。(第二コリント 5 章 7 節 /NKJV 訳)

(1) さらに、〔生けるみことばと書かれたみことばに対する〕信仰こそ、私たちが望んでいるものを確かなものとするものである。〔信仰は〕見えないものについての確証を与える。(ヘブル 11 章 1 節)

しかし、不従順な者たちにとっては(第一ペテロ 2 章 7-8 節)：私たちの主イエス・キリストの大祭司職にあずかることによって、父なる神に仕える王なる祭司とされていることは、まことに大きな栄誉です。そして、キリストにある私たちの立場と、不信者の立場との違いは、これ以上ないほどはっきりしています。たとえ、私たちが、金持ちの門前に横たわり、その金持ちと比べてこの世での境遇があまりにも惨めであった貧しいラザロのように、この世で患難や火のような試練のただ中に置かれるとしても(そしてそれは、キリストを真剣に信じる者にとって珍しいことではありません：第二テモテ 3 章 12 節)、キリストを受け入れることを拒む者たちが享受している祝福は、一時的なものにすぎないことを私たちはよく知っています。彼らにとって、キリストはつまずきの石です。つまり、この人生において問題となるのはイエスをどうするかということであり、イエスを受け入れることを拒む者は皆、その拒絶が意識的なものであれ、ただ受け入れようとしないというものであれ、それによって、自分が神と共に永遠に生きることを望んでいないことを示しているのです。したがって、この地上での短い人生において、イエス・キリストと、その方をどう考えるかということこそが、最も重要な問題なのです。建築者たち(すなわち、当時のユダヤ人指導者たち)は、実際には隅のかしら石であり、全被造物がその上に建てられている土台である方を退けました——なぜなら、十字架は初めから常に神のご計画の中心にあったからです。しかし、来たるべきあの偉大な日には、私たちの主がアルファでありオメガであられるという事実は、もはや否定することのできないものとなり、主の御前で「すべてのひざがかがめられ」(ピリピ 2 章 10 節; イザヤ 45 章 23 節; ローマ 14 章 11 節参照)、すべての者がこの方こそすべてのものの主であると認

めることになります。神のご計画において、彼らはこの運命に「定められていました」が、それは決して、彼らの側に真の選択がなかったという意味ではありません。なぜなら、不信者がつまずくのは、「みことばに[故意に]従わない」([第一ペテロ 2 章 8 節](#))ことによるからです。すなわち、救いはキリストへの信仰によってのみ得られることを明らかにする福音に従わないことによって、彼らは自らの責任で、自ら真理を拒絶することによって、つまずくのです。父なる神は、その大いなる正義によって、不信者にもこの選択をする権利を与えておられ、そして、その選択もまた、神のご計画の中にあらかじめ織り込まれているのです。

選ばれた種族([第一ペテロ 2 章 9 節](#))： ペテロは直前に、不信者が自ら招いた悲惨な状態について述べ、その少し前には、聖別と霊的成長に関してクリスチャンとして私たちが負っている責任を思い起こさせましたが、ここでいったん立ち止まり、イエス・キリストを信じる者として私たちが置かれている、言葉では言い表せないほどすばらしい立場に基づいて、私たちを励ましています。これは、神のみことばを教える人、さらにはそれを他の人々に分かち合う人にとっても、良い教訓です。信じることを拒むという選択が恐ろしい結果をもたらすことは確かであり、信者の責任が重大で困難を伴うことも確かです。しかし、イエス・キリストに属し、真に神の子となることの祝福は、前者とは対照的に栄光に満ちたものであり、後者に伴う「苦労」を払ってでも得る価値があることは疑いようがありません。真理について偏りのない全体像を示すことは非常に重要です。福音を伝える際にはいつでも、救いによってもたらされる良い結果と、キリストを拒むことによってもたらされる悪い結果という、両方の現実を示すべきです。同様に、聖書の真理を提示する際にも、キリストに従うことを決意した信者として私たちに約束されている祝福と報いと、キリストに従ううえで私たちが直面する困難、務め、責任とを、適切なバランスをもって示すべきです。ペテロはここで、その両方についてまさにそのようにしています。すなわち、この世において真理を正しく適用することについての勧めを続ける前に([11 節以下](#))、ここでいったん立ち止まり、クリスチャンとしての彼らの高められた立場を思い起こさせることによって、読者を励ましているのです。

七十人訳の[イザヤ 43 章 20 節](#)(そこではまったく同じギリシヤ語の表現が用いられています)に基づけば、「選んだ民」という表現は、この節に出てくるヘブル語の呼称「選ばれた民」をペテロが暗示したものであると言えます([申命記 7 章 6 節](#), [10 章 15 節](#); [歴代誌上 16 章 13 節](#); [詩篇 105 篇 6 節](#); [イザヤ 45 章 4 節](#), [65 章 9 節](#), [65 章 15 節](#), [65 章 22 節](#))にも同様の用例があります。[ローマ 9 章 11 節](#), [11 章 5 節](#), [11 章 7 節](#), [11 章 28 節](#)参照)。同じように主によって「選ばれた」他の方々、すなわち、メシヤ([イザヤ 42 章 1 節](#); [ヨハネ 1 章 34 節](#); [第一ペテロ 2 章 4 節](#), [2 章 6 節](#); [ルカ 23 章 35 節](#)参照)、ダビデ([詩篇 89 篇 3 節](#))、そしてモーセ([詩篇 106 篇 23 節](#))の

ことを考えるなら、これ以上すばらしい仲間はいないと言えるでしょう。また、[イザヤ 45 章 3 節](#)（およびそれと関連する箇所）におけるこの「選び」は、イスラエルの中の**信者たち**を指しているということもできます。それは、モーセとダビデ——そしてもちろんメシヤはなおさらのこと——が、単に血統に基づいて「選ばれた」のではなく、何よりもまず霊的な理由によって選ばれたことから分かります。ですから、もともとはイスラエルだけに属するものと理解されていた祝福を、ペテロが異邦人である読者たちにも当てはめていることは、初めは奇妙に思えるかもしれません。しかしペテロはここで、神の恵みによりキリストを信じる信仰を通して、私たちもその同じ選びの恩恵を受ける者となり、過去および現在のイスラエルの人々と同じように、神の民、神の家族の一員とされたのだと、はっきりと教えています——ただし、それは信じる人々についてです。なぜなら、信仰がなければ神に喜ばれることも、神から永続する恵みを受けることも不可能だからです（[ヘブル 11 章 6 節](#)）。私たち異邦人は野生のオリーブの枝のようなものですが、いわばイスラエルの幹に接ぎ木され、キリストにある新しい立場によって、同じ祝福を享受しています。私たちは皆、キリストにあって神の「選ばれた民」の一員なのです。⁴ ですから私たちは、時が始まる前に、神がそのご計画の中で私たち一人一人を救いのために選んでくださったという意味で「選ばれた者」であると同時に（ペテロがこの手紙の冒頭で説明しているとおりです。[第一ペテロ 1 章 1-2 節](#)；[第一テサロニケ 1 章 4 節](#)参照）、神の「選ばれた民」、すなわちキリストのからだであり花嫁である教会——イスラエルという土台の上に建てられている教会——の一員ともなったのです（[エペソ 2 章 20 節](#)）。

選び：キリスト教の教理において、「選び」は一般に個人的なもの、すなわちクリスチャン個人に関するものと考えられています。しかし、これまでの考察から明らかなように、「選択」（これが「選び」あるいは「選定」という概念の根底にあるものです）は**神の選択**であり、旧約聖書においてその選択は、ある特定の民、すなわちアブラハムの子孫であるイスラエルのユダヤ人に向けられていました。もちろん、新約聖書（そして旧約聖書）に豊富に示されている啓示から、肉体的な出自にかかわらず、実際に救われるのは信者だけであることを私たちは知っています（したがって、この意味で「イスラエルから出た者が皆イスラエルなのではない」のです。[ローマ 9 章 6 節](#)）。また、どの時代の信者も、その信者がユダヤ人の血統に生まれる祝福を受けていなかったとしても、すべて救われていることを確信することができます（例えば、[エペソ 2 章 8-9 節](#)）。です

⁴ また、別の箇所で見たとおり、永遠においては、血統上イスラエルに属していない教会時代の信者も、この世で私たちが主にどのように応答したかに応じて、実際にそれぞれイスラエルの十二部族のいずれかに割り当てられることになります。『[サタン](#)の反逆』第 5 部、II.8.c「[ユダヤの祭儀暦](#)」の「[イスラエル：究極の組織](#)」＜リンク先のファイルの 70 頁-/A4 印刷本「サタン

から、この命題の両面を心に留めておくことが重要です。神は一つの種族を、ご自身の特別な所有の民として選ばれました。そして私たち異邦人は、イエスの犠牲と、イエスおよびイエスが私たちのためになしてくださったことに対する私たちの信仰によって、その交わりに加えられる祝福を与えられたのです。

(11) それゆえ、覚えておきなさい。あなたがたはかつて肉によれば異邦人であり、肉において人の手によってなされた、いわゆる「割礼」の者たちから「無割礼の者」と呼ばれていた。(12) また、そのころあなたがたはキリストなしにあり、イスラエルの共同体から離れ、約束の契約についてはよそ者であり、この世にあって希望もなく、神もない者であったことを覚えておきなさい。(13) しかし今や、キリスト・イエスにあって、かつて遠く離れていたあなたがたは、キリストの血によって近い者とされたのである。(14) キリストご自身が私たちの平和であり、両者[ユダヤ人と異邦人]を一つにし、隔ての中垣、すなわち私たちの間にあった敵意を打ち壊された。(15) そして、ご自身の[肉の]からだによって、戒めとその規定からなる律法を無効にし、こうして平和をもたらすことによって、二つのものをご自身にあって一人の新しい人に造り直し、(16) また十字架によって、両者を一つのからだとして神と和解させ、それによって[神と人類との間の]敵意を滅ぼされたのである。(17) そして[第一の来臨において]来られた時、[神から]遠く離れていたあなたがたに平和の福音を宣べ伝え、近くにいた者たちにも平和を宣べ伝えられた([イザヤ 57 章 19 節](#))。(18) なぜなら、キリストを通して、私たち両者は一つの御霊によって御父に近づくことができるからである。(19) それゆえ、あなたがたはもはや異国人でも居候でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族の一員である。(20) あなたがたは使徒たちと預言者たちの土台の上に建てられ、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。(21) このキリストにあって、建物全体が組み合わされつつあり、主にある聖なる宮へと成長していく。(22) このキリストにあって、あなたがたもまた、御霊によって神の住まいとなるよう共に建て上げられているのである。([エペソ 2 章 11-22 節](#))

神が私たちを選ばれた根拠は私たちの信仰です。神が私たちを選ばれた結果は、私たちが一つのからだ、すなわち「神のイスラエル」である教会にあって一つとなったことです([ガラテヤ 6 章 16 節](#))。そして、この選びを実現する手段はイエス・キリストの犠牲であり、それなしには神のご計画は成り立ちません。選びの教理について考える際には、これらの重要な点を心に留めておく必要があります。ある神学の学派は、神が私たち個人を選ばれたことを強調するあまり、1) 私たちの自由意志が必要不可欠な要素であること、2) この選びの目的と結果が、真のイスラエル全体、すなわちイエス・キリストの教会の一員とされることであること、そして 3) 私たちの選びを可能にするのは十

字架であることを除外してしまっています。

「もしその日々が短くされなかったなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、**選ばれた者たち**のためには、その日々は短くされるであろう。」([マタイ 24 章 22 節](#) /NASB 訳)

「偽キリストたちと偽預言者たちが現れ、大いなるしるしと不思議を行って、できることなら、**選ばれた者たち**をさえ惑わそうとするであろう。」([マタイ 24 章 24 節](#) /NASB 訳)

「そして彼は、大いなるラッパの音とともに御使いたちを遣わし、天の果てから果てまで、四方からご自身の**選ばれた者たち**を集めるであろう。」([マタイ 24 章 31 節](#) /NASB 訳)

「まして神は、昼も夜もご自身に叫び求めている**選ばれた者たち**のために正しい裁きを行わず、彼らのために長く待たれるであろうか。」([ルカ 18 章 7 節](#) /NASB 訳)

だれが神の**選ばれた者たち**を訴えるのか。義とされるのは神なのである。([ローマ 8 章 33 節](#) /NASB 訳)

(3) 私たちの主イエス・キリストの神また父がほめたたえられるように。この方は、天にあるあらゆる霊的な祝福をもって、キリストにあって私たちを祝福してください。(4) すなわち、世界の基が据えられる前から、私たちが御前に聖別され、責められるところのない者となるように、神はキリストにあって私たちを**選ばれた**のである。([エペソ 1 章 3-4 節](#))

それゆえ、神の**選ばれた者**、聖なる愛されている者として、深いあわれみ、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい。([コロサイ 3 章 12 節](#) /NKJV 訳)

神に愛されている兄弟たちよ、神によるあなたがたの**選び**を知っている。([第一テサロニケ 1 章 4 節](#) /NKJV 訳)

それゆえ、兄弟たちよ、あなたがたの召しと**選び**とを確かなものとするために、なおいっそう励みなさい。これらのことを行うなら、あなたがたは決してつまづくことがないからである。([第二ペテロ 1 章 10 節](#) /NKJV 訳)

「彼らは小羊と戦うが、小羊は彼らに勝つ。小羊は主の主、王の王だからである。そして、小羊と共にいる者たちは、召された者、**選ばれた者**——そして[最後まで]忠実であった者たちである。」([黙示録 17 章 14 節](#))

さまざまな英訳聖書を調べてみると、ほとんどの訳が、「elect (選ばれた者)」や「election (選び)」の語源となっているギリシヤ語の語群を訳す際に、一貫していないことが分かります。例えば、ほかの箇所では「elect」と訳している聖書でさえ、「chose」や「chosen」を好んで用いることがよくあります。しかし、選びとは、神がイエス・キリストにあって私たちを選ばれたことであり、私たちがキリストを信じる信仰のゆえに選ばれたのであり、しかもそれが可能なのは、キリストがその血、すなわち十字架上の霊的な死によって私たちを買い取ってくださり、そこで私たちのすべての罪のために死んでくださったからである、ということを読者が理解しているなら、それで問題はありません。イエス・キリストの福音における神の召しに信仰によって応答する者は、すべて選ばれます([マタイ 20 章 16 節](#), [22 章 14 節](#); [第二ペテロ 1 章 10 節](#); [黙示録 17 章 14 節](#); [ローマ 8 章 29-30 節](#)参照)。選びは、イエス・キリストにあって永遠に神の家族に属する者であるという私たちのこの立場を確かなものとし、この教理は、私たちがこれほど熱心に待ち望んでいる御国に永遠にあずかることについて教えています。この人生において重要なのは、この世がだれを好むかではありません——この世は過ぎ去りつつあり、悪しき者のふところにあるからです——重要なのは、神がだれを選ばれるかです。すなわち、神の選民、神に選ばれた者たち、イエス・キリストを信じる者たちです。彼らは、「選ばれた民」である真のイスラエルを中核としてその上に建てられたキリストの教会を構成しており、その人々と共に、私たちは皆「選ばれた種族」の一員なのです([マルコ 13 章 20 節](#), [13 章 22 節](#), [13 章 27 節](#); [ヨハネ 15 章 16 節](#), [15 章 19 節](#); [第一コリント 1 章 27-28 節](#); [第二テモテ 2 章 10 節](#); [テトス 1 章 1 節](#); [ヤコブ 2 章 5 節](#))。

王なる祭司職([第一ペテロ 2 章 9 節](#))：上の 5 節を扱ったところで、私たちはすでに、キリストの花嫁の一員として、私たち信者が主の大祭司職にあずかるという祝福について詳しく論じました。そして、私たちは永遠に主と一つであり、主が持つておられるすべてのものにあずかる者ですから、主の王権にもあずかり、主の再臨後、千年間、主と共に支配し、その後も永遠に支配することになります。千年王国では、王の王という職と大祭司という職、この二つの職をともに勝ち取られたイエス・キリストの支配のもとで、地上の権威と天からの権威との間にもはや区別はなくなります。なぜなら、その時から時の終わりまで、神の御国が地上に存在することになるからです——そして私たちは、主が第一の地位を占めておられるその両面にあずかり、支配者であると同時に祭司、すなわち王なる祭司、祭司の王国、「王なる祭司職」となります。それは、人類に対して神

を代表すると同時に、勝利を収められた私たちの救い主の統治に仕える役人として、人類を治めるものです(こうして、私たちもその一員とされたイスラエルに対する以前の約束が、余すところなく成就することになります。[出エジプト 19 章 6 節](#); [イザヤ 61 章 6 節](#)参照)。

そして、キリストは私たちを**御国**とし、ご自身の神また父に仕える**祭司**としてくださった。栄光と力とが、とこしえにキリストにあるように。アーメン。(黙示録 1 章 6 節)

(9) そして彼らは新しい歌を歌って言った。「あなたは巻物を受け取り、その封印を解くにふさわしい方です。あなたはほふられ、その血によって、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から[人々を]私たちの神のために買い取られたからです。(10) そして彼らを、私たちの神のために**御国と祭司**とされました。彼らは地上を**治める**でしょう。」(黙示録 5 章 9-10 節)

この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者、また聖なる者である。この人々に対して第二の死は何の力も持たない。彼らは神とキリストとの**祭司**となり、千年の間、キリストと共に**支配する**のである。(黙示録 20 章 4-6 節)

聖なる国民([第一ペテロ 2 章 9 節](#))：教会についてのこの表現も同様に、もともとは一つの国民としてのイスラエルに対して用いられたものです([出エジプト 19 章 6 節](#))。もちろん、イスラエルは信仰を基礎として始まりました。アブラハムがその最初の者であり、その息子のうち信仰の系譜を受け継いだのはイサクだけでした(イシマエルはイスラエルには含まれませんでした)。そしてイサクの息子のうち、信仰を持っていたヤコブだけが、主によって「イスラエル」と名を改められ、祝福を受ける者となりました(エサウは神の選びによってそこから除外されましたが、その選びは、彼自身が軽んじていた信仰の長子の権利を売り渡したことによって確認されたのです)。時が経つにつれて、確かにイスラエルの中の多くの者が、アブラハムの信仰を持つ者ではないことを自ら明らかにし([ローマ 9 章 6 節](#))、したがって「約束の子孫」の一員ではないことが明らかになりました([ローマ 4 章 16 節](#))。私たちの主の再臨によって御国が到来すると、血統と信仰との間にもはや区別はなくなります。教会全体が復活し、イスラエルの部族組織の中にそれぞれ割り当てられ、その時にはあらゆる意味で「聖なる国民」となります。すなわち、立場上、また経験的に聖別されているだけでなく、最終的にも完全に聖別され、教会の一人一人が罪のない完全な者として永遠に生きることになります。こうして、歴史上のイスラエルにとっては、願望にとどまり(人間の罪深さのため)、また理論上のものにとどまったこと(自由意志のゆえに、アブラハムの肉による子孫の多くが信

者にならなかったため)が、現実のものとして実現するのです([ローマ 11 章 7 節](#), [11 章 28 節](#))。

神のものとして保たれる民([第一ペテロ 2 章 9 節](#))：「祭司の王国」や「聖なる国民」と同様に、この表現も[出エジプト 19 章 5-6 節](#)(特に 5 節)に由来していますが、ペテロはこの祝福を最後に取り替えています。ここで「保たれる」と訳されているギリシア語(ペリポイエー peripoie- / π ε ρ ι π ο ι η -)の語根は、獲得、保全、所有に関するものであり、ここでのペテロの用法には、これら相互に関連する意味のすべてが含まれています。[出エジプト 19 章 5 節](#)のヘブル語では、segullah (הִלָּלָה)という語は「所有」を意味し、イスラエル(そしてその延長として教会のすべての信者)が、特別な意味で主に属していることを表しています。しかし、新約聖書におけるこの語根の用法から分かるように、ここで念頭に置かれているのは、主が私たちをご自身のものとして所有しておられることだけではありません——主が私たちを獲得されたこと、また私たちが救いを獲得し、それによって主のものとなったことも含まれています——そして、とりわけここで用いられているこの特定の語(ペリポイエーシス peripoiesis / π ε ρ ι π ο ι η σ ι ς)には、「保全」という意味があります。イスラエルを土台として建てられた教会である私たちは、救いと復活に至るまで「保たれるべき民」なのです——そして復活の時に、私たちは永遠に主を礼拝し、主に栄光を帰すことになります([ルカ 17 章 33 節](#); [使徒行伝 20 章 28 節](#); [第一テモテ 3 章 13 節](#)参照)。

「彼らはわたしのものとなる」と万軍の主は言われる。「わたしが、わたし自身の所有(セグッラー segullah / הִלָּלָה / 七十人訳: peripoiesis / π ε ρ ι π ο ι η σ ι ς)を備える日に、わたしは彼らを惜しむ。人が自分に仕えるその子を惜しむように。」([マラキ 3 章 17 節](#) / NASB 訳)

もちろん、救われることと、新しい永遠のからだ、すなわち、私たちが主と共に永遠に生きることのできる、そして実際に生きることになる「復活のからだ」を与えられることなしに、主の永遠の「所有」の一部となることはできません。このため、新約聖書におけるこの語および同じ語根を持つ語群は、ほとんど常に復活のからだと、それに伴う報いを指しています(この共通する独特な語根が存在するにもかかわらず、この非常に重要な点は、注解書や翻訳では例外なく見落とされています)。主のために主によって保たれ、主の特別な所有となり、それに伴う祝福を享受することは、すべて私たちの永遠の相続財産にかかわることなのです。

(13) [キリスト]にあつて、あなたがたもまた、真理のみことば、すなわちあなたがたの救いの良き知らせを聞き、[このキリストを]信じた時、約束の御霊、す

なわち聖霊によって証印を押された。(14) この御霊は、私たちの相続財産(私たちの復活のからだに基づくもの)の保証であり、その保全(peripoiesis / $\pi \epsilon \rho \iota \pi \omicron \iota \eta \sigma \iota \varsigma$ 、すなわち、私たちの復活と報いをあらゆる面で守ること)が贖われる時までの保証であって、神の栄光がほめたたえられるためである。(エペソ 1 章 13-14 節)

(9) なぜなら、神は私たちを御怒りに定められたのではなく、私たちの主イエス・キリストを通して[私たちの]救いを所有すること(peripoiesis / $\pi \epsilon \rho \iota \pi \omicron \iota \eta \sigma \iota \varsigma$ 、すなわち、復活の時に完全に獲得されること)に定められたからである。(10) キリストが私たちのために死なれたのは、私たちが目を覚ましていても、眠っていても(すなわち、死んで天に行っている)、[その復活の日]にキリストと共に生きるためである。(第一テサロニケ 5 章 9-10 節)

まさにこの目的のために(すなわち、御霊による聖別と真理を信じる信仰を通して救われるために。13 節)、神は私たちの福音を通してあなたがたを召されたのである。それは、私たちの主イエス・キリストの(すなわち、主から来る)栄光(すなわち、復活)を永続的に所有すること(peripoiesis / $\pi \epsilon \rho \iota \pi \omicron \iota \eta \sigma \iota \varsigma$)ができるようになるためである。(第二テサロニケ 2 章 14 節)

(39) しかし、私たちは滅びに至る臆病な背教に属する者ではなく、[永遠の]命の保全(peripoiesis / $\pi \epsilon \rho \iota \pi \omicron \iota \eta \sigma \iota \varsigma$ 、すなわち、復活における命)に至る信仰を持つ者である。(ヘブル 10 章 39 節)

神のすばらしさを宣べ伝えるために(第一ペテロ 2 章 9 節)：「選ばれた種族」という称号がイザヤ書から取られているのと同じように、この言葉も同じ箇所から取られており、具体的にはイザヤ 43 章 21 節に出てきます。しかしペテロは、御霊によって、私たちが神の栄光を宣べ伝えることを、その前に列挙された、神から受けている数々の恩恵と直接結びつけ、しかも文法上、目的を表す節として述べています。言い換えれば、私たちが「選ばれた種族」、「王なる祭司職」、「聖なる国民」、「神のものとして保たれる民」とされたことの背後にある**神の目的**は、まさにこれです。すなわち、神の善良さ、すばらしさ、そして栄光を証しすることです。

「主なるわたしは、義をもってあなたを召し、あなたの手を取り、あなたを守り、あなたを諸国の民のための契約とし、異邦人のための光とする。」(イザヤ 42 章 6 節)

この節は、私たちの主の初臨と、救いがイスラエルをはるかに越えて世界のすべての国々へと劇的に広がっていくことを預言したのですが([イザヤ 49 章 6 節](#); [使徒行伝 13 章 47 節](#), [26 章 23 節](#))、イスラエル自身にも当てはまります。世が神の民イスラエルの証しのうちに主が映し出されているのを見るべきであったのと同じように、今や世は、主の教会のすべての成員の言葉と行いのうちに主が映し出されているのを見るべきです。しかし、イスラエルが民全体としてこの点で十分に果たせなかったのと同じように、私たちクリスチャンも、一人一人がそうならないよう注意する必要があります。この使命を果たすためには、霊的成長が不可欠です。神の「徳」あるいは「すばらしさ」(アレテー:ギリシヤ語 arete)——神の完全な性質と、私たちおよびこの世に対する恵みに満ちた御業のすばらしさ(何よりもまず、十字架におけるイエス・キリストの犠牲)——を宣べ伝えるには、神とそれらについて口先だけで語る以上のことが必要です。なぜなら、問題となるのは、単に私たちが語るかどうかだけではなく、何を語り、どのように語るかであり、さらに、それを語る私たち自身が「どのような者であるか」も重要だからです。死に至る罪まであと一步というところにおいて、あらゆる不道德な行いをしているクリスチャンは、たとえ口ではまったく正しいことを正しい仕方語っていたとしても、神の栄光を宣べ伝える証人としてふさわしいとはとても言えません。さらに、重要なのは私たちの言葉だけではなく、私たちの行いも非常に重要です。ヤコブが強調しているように、口ではいろいろなことを言いながら、それと一致しない行いによって、その言葉が空しいものであることをすぐに証明してしまうのでは、ほとんど意味がありません([ヤコブ 2 章 14-17 節](#))。ですから、主について語らないことが問題であるのと同じように、間違った仕方主について語ることも問題です。そして、私たちを見ているすべての者——人間にも御使いたちにも——神の善良さ、あわれみ、愛、栄光をそれ自体で明らかにするような生き方をもって証しすることができないなら、それはおそらく何よりも大きな問題です。なぜなら、それは霊的成長、前進、実を結ぶことが欠けていることを示しているからです。そして、救われた後のこの地上での私たちの人生の目的は、まさにこの霊的成長、前進、実を結ぶことにあります。

- (17) さて、主は御霊である。そして、主の御霊のあるところには自由がある。
- (18) そして私たちは皆、顔を覆い隠す「おおい」がなく、主の栄光を映し出すなら(すなわち、クリスチャンとしての証しを汚すことなく保つなら)、同じ[神の]かたちへと変えられていき(すなわち、私たちが自らの意志を用いて神に応答するにつれて、ますますキリストに似た者となり)、そうするにつれて、ますます大きな[神の]栄光を映し出すようになる(字義的には「栄光から栄光へ」)——まさに、主の御霊が[私たちを変える]働きをなさる方である以上、当然そうなるのである。([第二コリント 3 章 17-18 節](#))

このすべてにおいて私たちを助けてくださる聖霊が与えられており、また、その目的を果たすために豊かな祝福——永遠の命のために神に選ばれ、全能の神の王なる祭司とされ、神の聖なる国民の一員となるよう近くに引き寄せられ、復活と報いに至るまで保たれる神の民の中に加えられていること——が与えられているのですから、私たちは、考えること、語ること、行うことのすべてにおいて、神の驚くべきすばらしさを表すことを怠ってはなりません。むしろ、これらの比類のない祝福に対して、私たちの愛する主であり救い主である方が望んでおられる仕方に応じていくことを心がけようではありませんか。主が「世の光」であられるように([ヨハネ 8 章 12 節](#), [9 章 5 節](#))、私たちもまた、私たちが考え、語り、行うすべてにおいて主をほめたたえ、主と、私たちに対する主の恵みに感謝をもって応えることによって、メッセージそのもの、救いのみことばそのものであられる主を良く映し出すべきです——それによって、主と私たちの天の父に、ふさわしいすべての賛美を帰するためです。

(14) 「あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。(15) また、あかりをつけて、それを升の下に置く者はいない。むしろ燭台の上に置く。そうすれば、家の中のすべての者を照らす。(16) そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。それは、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるためである。」([マタイ 5 章 14-16 節](#) ・/NIV 訳)

いずれにしても、私たちは永遠にわたって、この神を賛美するという使命を確かに果たし続けることになるのです。

あなたの家に住むことになる者たちは幸いである。
彼らはとこしえにあなたをほめたたえる。([詩篇 84 篇 4 節](#))

……あなたがたを暗やみから光へと召し出された方の([第一ペテロ 2 章 9 節](#))：この世は、恐れと絶望に満ちた暗やみの世界です。しかし神は、「世の光」であられるイエス・キリストという御方において、ご自身の光を輝かせ、この世を照らしてくださいました([イザヤ 42 章 6 節](#), [49 章 6 節](#); [ヨハネ 8 章 12 節](#), [9 章 5 節](#), [12 章 46 節](#); [イザヤ 9 章 2 節](#), [10 章 17 節](#); [ヨハネ 1 章 4-5 節](#), [1 章 9 節](#)参照)。

(12) [永遠の]光の中にある聖徒たちの相続財産にあずかるにふさわしい者としてくださった父に感謝しなさい。(13) [まさにその方が]私たちを暗やみの力から救い出し、その愛する御子の御国へと移してくださったのである。([コロサイ 1 章 12-13 節](#))

死に代わって永遠の命を持ち、さばきへの恐れに代わって復活の希望を持ち、この世の暗い偽りに代わって真理の光を持っている私たちが、暗やみから、私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストの栄光に満ちた光へと私たちを召し出してください。私たちがそれを肯定的に応答することを御父があらかじめ知っておられたことに基づいて、御父が私たちを召されることも、そのご計画の中にあらかじめ定められていました([ローマ 8 章 28-30 節](#))。真理の光と、今はキリストにある私たちの立場という意味においてのみ享受している永遠の命へと召されたこの召しは、私たちがあらゆる点で「主にあって光」となる栄光化の時をも前もって指し示しています([エペソ 5 章 8 節](#); [詩篇 73 篇 24 節](#)参照)。これから来るその栄光の日には、私たちは皆、主によって「完全に知られているように」、真理を完全に知ることになります([第一コリント 13 章 12 節](#))。ですから、その日まで、私たちを救いに導いた真理の光をしっかりと受け入れ続け、それによって光の中で主と共に歩み続け、あらゆる偽りを退け、ご自身の命をもって私たちを買い取ってくださった方の栄光に満ちた光を映し出し続けようではありませんか。

(8) あなたがたは、かつては暗やみであったが、今は主にあって光である。光の子として歩みなさい。(9) 光が生み出す実は、あらゆる善と義と真理にかなうものである。(10) それゆえ、[すべてのことにおいて]何が主に喜ばれることであるかを[常に]見極めなさい。(11) そして、実を結ばない暗やみの行いに加わってはならない。むしろ、それらがそのようなものであることを明らかにしなさい。(12) なぜなら、[真理を拒む]者たちが暗やみの中で行っていることは、口にすることさえ恥ずべきことだからである。(13) しかし、すべてのものは光に照らされると、[その本当の姿が]明らかになる。(14) なぜなら、[そのように照らされて]明らかにされたものはすべて光だからである。それゆえ、こう言われている。「眠っている者よ、起きよ！ 死人の中から目を覚ませ。そうすれば、キリストがあなたの上に[真理の光を]照らされるであろう！」([エペソ 5 章 8-14 節](#))

今や神の民([第一ペテロ 2 章 10 節](#))：ペテロがこの手紙の冒頭で受取人たちに述べたように、彼らはかつて「寄留者」でしたが、今や彼らも私たちも、私たちのためにささげられたキリストの犠牲を通して、イエス・キリストに属する者として「選ばれ」ました。この節は(二つの連からなる)詩の形式で構成されており(ギリシヤやローマの詩の形式ではなく、ヘブル詩の形式に従っています)、したがって、これはペテロが前の節ですでに述べたことを単にもう一度強調しているものではありません。むしろ、ユダヤ人だけでなく異邦人の中からも、ご自身のために一つの民を召し出された神の栄光に満ちた

御業を、喜びをもって高らかにたたえているのです。ここで、「割礼を受けた者たち」への使徒であり([ガラテヤ 2 章 7-8 節](#))、異邦人と会うだけでも御霊から非常に詳しい指示と励ましを必要とし([使徒行伝 10 章 10-16 節](#))、しかも後には、この点を実際に適用するうえで完全ではなかったペテロが([ガラテヤ 2 章 11-14 節](#))、今や、あらゆる意味で自分が使徒となった異邦人たちの救いを心から喜んでいるのを見るのは、実に喜ばしいことです。この時までにはパウロは殉教していましたが、ペテロは小アジアにおけるパウロの働きを引き継ぎ、異邦人の間でも豊かな収穫を刈り取るようになっていました。

(11) それゆえ、覚えておきなさい。あなたがたは、かつて肉によれば異邦人であり、肉に施された人の手による、いわゆる「割礼」を受けた者たちから、「無割礼の者」と呼ばれていた。(12) そのころ、あなたがたはキリストから離れ、イスラエルの共同体から除外され、約束の契約についてはよそ者であり、この世にあって希望もなく、神もない者であったことを覚えておきなさい。(13) しかし今や、キリスト・イエスにあって、かつて遠く離れていたあなたがたは、キリストの血によって近い者とされたのである。([エペソ 2 章 11-13 節](#))

今やあわれみを受けた者 ([第一ペテロ 2 章 10 節](#))：ヘブル詩(箴言の中に最も分かりやすく見ることができます)に見られるように、第二の連は第一の連を説明し、それと並行しています。どちらの連においても、後半は前半との対比によって、ペテロの読者たち(そして私たち)に起こった栄光に満ちた変化を示しています。かつて彼らは、何ら良い目的のための「民[ですら]なかった」のですが、今や「神の民」となりました。同じように、彼らも私たちも、そしてすべての信者も、以前は神の怒りの下にありましたが([エペソ 2 章 3 節](#); [ローマ 1 章 18 節](#)参照)、今や私たちは赦され、救いに至るために受けた神のあわれみを喜び誇っています([エペソ 2 章 4-7 節](#); [第一テサロニケ 5 章 9 節](#))。ここで注意すべきなのは、「あわれみ」はギリシヤ語の エレオス eleos (ヘブル語の ヘセド chesedh に対応する語)であり、神の恵みと、救いの結果として神にあって私たちが持つ平安／完全な状態／祝福とを結びつける「橋渡しとなる祝福」であるということです([第一テモテ 1 章 2 節](#); [第二テモテ 1 章 2 節](#); [テトス 1 章 4 節](#); [第二ヨハネ 1 章 3 節](#))。神はその恵みによって、そうでなければ私たちを罪に定めることになる罪の問題に対する解決を備えてくださいました——しかも、ご自身にとってこれ以上ないほど大きな代価を払ってそうしてくださいました。救いの結果として、私たちは神の平安を得ています——すなわち、怒りとさばきを取り除かれ、祝福に満ちた関係が回復されたのです。その関係は今でもすばらしいものですが、永遠においては想像をはるかに超えるものとなります。そしてその間にあって、神の恵みと、信仰によって神の救いの申し出を何の功績もなしに受け取る私たちとが会おうところで、私たちは神のあわ

れみを経験するのです。私たちの側には、神との間に平和を回復し、和解を実現するために神に差し出せるものは何一つありませんでした。そのため、神がすべてを備えなければなりませんでした。それが、私たちのすべての罪のために死なれた、十字架におけるイエス・キリストの犠牲です。私たちがすることは、救い主であるキリストと、私たちには支払うことのできなかった贖いの代価を支払うためにキリストがしてくださったことを信頼し、その恵みの賜物を受け取るだけです。⁵ このようにして私たちは、神の恵みによってもたらされる神のあわれみを受け、その結果、いと高き神の息子、娘として、イエス・キリストにあって神との関係が回復されたことによる平安を享受するのです。⁶ 罪と死から救い出され……その代わりに神ご自身の家族の一員とされること以上に、この地上ですばらしいことはありません。ペテロがこの真理をこのような特別な形で記しておくことがふさわしいと考えたのも不思議ではありません。

かつては「民ではなかった」あなたがたが、
今は「神の民」とされ、
かつては[神の]あわれみを受けていなかったあなたがたが、
今はそのあわれみを受けている。

([第一ペテロ 2 章 10 節](#))

罪から贖われ、神と和解するためのこのあわれみは、私たちすべてのためにイエスが霊的な死を遂げてくださったことを通して、全人類に差し出されています。信じる私たちが、イエス・キリストへの単純な信仰を通して、このすべての賜物の中で最も偉大なものを実際に受けるという祝福にあずかったことを、神に感謝し、神をほめたたえようではありませんか。キリストは、すべてを捨ててこの世に来られ、私たちを死から救ってくださいました方です！ ですから、この最も偉大な祝福——そして、そこから生じ、これまで扱ってきた節々に述べられている、ほかのすべてのすばらしい祝福——を最大限に生かすために、霊的に成長し、前進し、実を結び続けることに、あらゆる努力を払おうではありませんか。それは、私たちが命そのものよりも愛している方、私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストの栄光のためなのです。

⁵ [『聖書の基礎第 4 部 A: キリスト論』II.「イエス・キリストの救いの御業」7.「贖い」](#) <リンク先ファイルの 253 頁-/A4 版印刷本では 251 頁->を参照してください。

⁶ [『聖書の基礎第 4 部 A: キリスト論』II.「イエス・キリストの救いの御業」9.「和解」](#) <リンク先ファイルの 263 頁-/A4 版印刷本では 261 頁->を参照下さい>を参照してください。